

SFRT を用いた事例検討会の効果と課題 —参加者へのインタビュー調査より

高 城 絵里子* 西 村 もゆ子** 熊 谷 珠 美***
中 岡 純 子**** 新 井 陽 子***** 田 中 美 帆*****
 澤 絵 里*****

抄 録

本研究は、SFRT を用いた事例検討会の効果と課題について、インタビューの分析を基に検討したものである。SFRT を用いた事例検討会へ2回以上参加した4名を対象に半構造化インタビューを実施し、語りの共通性や特異性を分析した。結果、参加者が「安全」、「安心」を感じ、事例発表者として「肯定され」、「支え」になったこと、サポーターとして「興味深く」、「面白い」時間になったこと、一方、「戸惑い」や、「不全感」を感じる参加者もいたことなどが示された。以上から、SFRT を用いた事例検討会の効果として、①参加者の安全、安心を高める点、②参加者のエンパワメントを促進する点、③参加者に新しい学びを提供する点を考察した。また、効果の要因としてSFRT を用いた事例検討会の特徴を検討し、事例検討の進め方が構造化されている点や、肯定の時間や提案の時間などが組み込まれている点などを挙げた。最後に本研究の意義と課題が示された。

Keywords: SFRT 解決志向アプローチ 事例検討 スーパーヴィジョン エンパワメント

問題と目的

経験の長さに関わらず、心理臨床家にとって事例検討会は成長の場として欠かせないものであ

る。わが国における従来の事例検討会は、事例発表者、指導者／コメンター、参加者で構成され、一つの事例にじっくりと時間をかけて検討する方法が一般的であり、若い心理臨床家を養成訓練す

*Takaki, Eriko
ルーテル学院大学
セラピールームレコルト

**Nishimura, Moyuko
Center for HEART/HEART カウンセリングセンター

***Kumagai, Tamami
Center for HEART/HEART カウンセリングセンター

****Nakaoka, Junko
Center for HEART

*****Arai, Yoko
Center for HEART/HEART カウンセリングセンター

*****Tanaka, Miho
Center for HEART/HEART カウンセリングセンター

*****Sawa, Eri
セラピールームレコルト

る場として大きな意義を持ってきた（村山・中田，2012）。一方で、こうした従来の方法ではコメンターや発言力のある人が場を占領してしまいがちになり、参加者、特に経験の浅い人が自由に発言しづらく、受け身になりがちであることが指摘されている（村山・中田，2012）。また、フロアやコメンターからの批判によって事例発表者が傷つき、会の安全性が損なわれることや、コメンターの流派間の闘争になりやすく、事例発表者が置き去りにされてしまう点なども、課題とされる（村山・中田，2012）。筆者らも、これまでの事例検討会への参加経験から、指導の意識が強すぎるあまり事例発表者の「できていない点」に目が向きやすく、各参加者の経験や知識、専門性や、発表者の「できていること」については十分に吟味され活かされていないという課題を感じてきた。

こうした問題に対し、解決志向アプローチの考え方や家族療法のリフレクティングの手法に基づいて開発されたグループ討議の方法として、ソリューション・フォーカスト・リフレクティング・チーム（Norman, 2003；以下、SFRT と略）がある。SFRT では、発表者に解決策にたどりつける能力があるという視点に立ち、発表者の努力や戦略を尊重しながら、まだ試されていない新しいアイデアや視点を提案し、既にできていることを十分に評価することで発表者をエンパワメントする（Norman, 2003）。この方法を、心理臨床の事例検討会として用いるための手順としてまとめ、熊谷らは2013年からこれまでに20回以上の検討会を実施してきた。参加者は臨床心理士や公認心理師、医師、弁護士などの守秘義務を有する者で、性暴力や対人トラウマ被害の支援に関わっている専門家であり、延べ100人以上にのぼる。また、この手法を用いた事例検討会の研修を全国の公的機関や支援相談機関など10カ所以上で行い、さらに2020年からはCovid19に対応してZoomを用いたオンライン形式で事例検討会を継続している。

現在実施されているSFRTを用いた事例検討会は、事例発表者とサポーター、司会進行、タイ

ムキーパー役で構成され、推奨人数は4人～10人程度で、1回の事例検討につき30分以内で行われる。手順を表1に示す。各段階の時間は目安であり、30分の時間制限内に終了する範囲であれば、変動があっても構わない。通常司会が兼務することが多いが、タイムキーパーが時間管理を行う。質問やコメントは1回の発言機会につき原則1つで順番に行うが、時間に余裕があれば2巡目、3巡目と順番が回っていくため、複数回コメントする機会もある。事例発表者は事前の準備を求められるが、一般的な事例検討会と異なり書面での資料の準備は必須ではない。

事例検討会について同様の問題意識から開発されたものに、PCAGIP法（村山・中田，2012）がある。PCAGIP法は、パーソンセンタード・アプローチのグループ観に基づき、「事例提供者が簡単な事例資料を提供し、ファシリテーターと参加者が安全な雰囲気の中で、その相互作用を通じて参加者の力を最大限に引き出し、参加者の知恵と経験から、事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向やヒントを見出していくプロセスを共にするグループ体験」と定義されている（村山・中田，2012）。具体的な約束事として、①記録を取らないこと、②事例提供者を批判しないこと、が伝えられた上で実施され、「事例提供者を被告にしない安全な事例検討会」として、心理臨床領域のみならず、多様な領域や対象へと応用範囲が広がっている（並木・小野，2016）。PCAGIP法に関する先行研究では、参加者および事例提供者の体験に焦点をあてたもの（村山他，2009；小野，2020）や、参加者のバーンアウト傾向、気分の変化などを取り上げた効果検討（望月，2013；井出，2013）などがあり、PCAGIP法の効果や機能の検討が進められている（小野，2020）。

SFRTを用いた事例検討会は、「事例提供者を被告にしない、安全な事例検討会」という基本姿勢について、PCAGIP法と共通している。一方で、PCAGIP法が1事例90分～120分で行われるのに対し、SFRTを用いた事例検討会は1事例30分と、所要時間が短くて済む点が大きく異なる。

表 1 SFRT を用いた事例検討会の手順 () 内の時間は目安

段階	内容	ルール
Preparing 準備する (事前)	事例発表者が、事例検討で何をしたいのか具体的に考えておく。	紙に書いて配る場合は用紙 1 枚にとどめる。
Presenting 発表する (4 分)	事例発表者が相談の概要を話す。とくに何に助けが必要かをサポーターに伝える。	事例発表者だけが話す。
Clarifying 質問する (6 分)	状況を正確に理解するための質問を事例発表者にする。さらに事例発表者を褒める材料を探す質問をしてもよい。	サポーターは順番に 1 回につき、1 つの質問をする。
Affirming 肯定する (3 分)	サポーターから事例発表者に、それぞれが受けた良い印象について簡潔に伝える。	事例発表者は静かに耳を傾ける。
Reflecting 発案する (12 分)	事例発表者の話を聴いて、考えたことや、提案したいことを伝える。	サポーターは順番に 1 回につき 1 つだけ話す。事例発表者は静かに耳を傾けながらメモを取る。時間がくるまで続ける。
Closing 終結する (5 分)	事例発表者がお礼を述べ、この事例検討で何をえたかを簡潔にコメントする。	事例発表者だけが話す。

*この手順は Norman, H. (2003) や Norman, H. et al.(2005) などを参考に、熊谷珠美が翻訳し、まとめたものであり、手順の指導は The Bristol Solutions Group の McKergow 氏と Clarke 氏から受けている。

る。また、SFRT を用いた事例検討会は、実施手順の全体が構造化され、事例発表者を批判しないことに加えて事例発表者を肯定する、介入のアイデアを発案しあうというプロセスが初めから明文化されている点も、PCAGIP 法とは異なる。

Jacyna & Harris-Waller (2014) は、社会福祉分野における SFRT を用いた事例検討会の実践を報告し、明確な構造であること、肯定する時間があること、また肯定する時間の後に発案の時間があることなどによって、チームでお互いが尊重し、安全な雰囲気で見えを出し合い、様々な意見にオープンに耳を傾けることができるようになる」と記している。その他にも、ビジネス・コンサルティングの分野など (Norman, Pidsley, & Hjerth, 2005)、海外ではすでに様々な実践と効果検討が発表されている。一方で、本邦においては SFRT を用いた事例検討に関する実証的研究は行われておらず、SFRT を用いた事例検討会の有効性について検討することが急務であると考ええる。そこで本研究では、SFRT を用いた事例検討会へ複数回参加経験を持つ支援者を対象として、どのような背景でこの事例検討会参加に至ったの

か、また事例検討会への参加がどのような体験となったのかについて、インタビュー調査により明らかにすることを目的とする。その上で、SFRT を用いた事例検討会の特徴と効果を考察する。

方 法

調査対象 対象者は SFRT を用いた事例検討会に 2 回以上参加歴のある支援者 4 名 (男性 2 名、女性 2 名) である。対象者の年齢層、SFRT を用いた事例検討会への参加回数を表 2 に示す。

調査期間 20XX 年 11 月～20XX 年 12 月

所要時間 30 分～60 分

方法 オンライン会議システム (ZOOM) を用いて、インタビューガイドを元にした半構造化面接を実施した。

インタビューガイド ① SFRT を用いた事例検討会参加の動機、② SFRT を用いた事例検討会への参加がどのような体験になったか、③ 事例発表者として参加した回について (期待、満足度、臨床への活用)、④ サポーターとして参加した回について (期待、満足度、臨床への活用)、⑤ リピート参加の理由、⑥ SFRT を紹介するとした

表2 面接対象者の属性

	年齢	性別	職種	事例発表者としての参加回数	サポーターとしての参加回数
A	50代	男性	心理師（司法領域）	1回	4回以上
B	40代	女性	相談員（福祉領域）	1回	4回以上
C	40代	女性	心理師（福祉領域）	1回	4回以上
D	30代	男性	心理師（医療領域）	3回	4回以上

らどのように勧めるか

分析 本研究では、仮説生成や理論構築を目的とした手法はとらず、中原ら（2022）の分析方法に従って、半構造化面接で語られた個々の参加者のSFRTを用いた事例検討会参加の背景や、参加して感じた思いについて、インタビューガイドに沿って共通性や特異性を中心に分析した。

倫理的配慮 本研究の実施に際して、データは統計的に処理され研究目的以外には使用しないこと、参加は任意であること、個人の意思でいつでもやめても良いことを同意書および口頭で説明し、同意書への自筆署名をもって研究協力の同意とみなした。なお、研究に先立ち、筆頭筆者所属機関の倫理審査委員会の承認を得ている。

面接対象者の語りの概要

共通点、特異性の分析に先立ち、対象者の語りの概要を以下に記す。中原ら（2022）に倣って、できる限り対象者の語りをそのまま用いた。

Aさん

参加動機は、もともと事例検討会が好きじゃないというようなところがあって、いつも体験しているのとは違う、明るいポジティブな事例検討会に参加したいと思ったため。また、参加した動機づけ面接の勉強会でSFRTを使用していて、動機づけ面接以外の場面でどのようにSFRTが使われるのかを体験したいと思ったため。

参加してみて、「いいことを言わなくては」というプレッシャーがなく自由に色々なことを考えられる、質問できる、発言することに魅力を感じる。

事例発表者としては、「SFRTで発表したらどんなふうになるか？」という好奇心を持って参加。発表直後はその期待に対しては75～80%の満足度で、具体的にこうすればいいということはなく若干拍子抜けしたとを感じる部分もあったが、少し引いた視点からのコメントや、今の方針の関わり方でよいということを受けたことにより、徐々にケースに対する関わり方の指針を得られたように感じられてきた。

サポーターとしての参加経験は、普段触れない領域での話を聞くことができて興味がわき、楽しみにしていた。また安心感の中で一つのケースについてみんなで考える体験はとても心地よかった。満足度としてはスタッフが毎回安心感を大切にした場を作ってくれ、一つのケースについて安心して話し合うことができたので、100%。豊かな時間であった。サポーターとしての体験は、正解を伝えることよりもむしろ、ケース発表者が何を求めているのかを知りそれについて考えていることを伝えるというスタンスが自身の臨床活動にも役立つと感じている。様々な職域で働く人が集まり、ケースについて安心して考えることができる点は仕事に活かすことができると思う。また、孤立して働いている心理師にとってSFRTはよいのでは？と感じている。

SFRTにリピートして参加しているのは、心地よさと同時に刺激もあり、必要な空間だと感じているから。

SFRTについては安心、安全な場であると人に紹介したい。またサポーターとして事例発表者をサポートする体験はとても良い学びになると伝えたい。

B さん

職場のケース会議では、記録を読んでみんなでダメ出しする感じになりがち、経験豊富な人が主導権を握りがちになり、誰もが自由に発言しづらくなっている感じがして、それを打破したいと思っていた。外部から先生を招いて事例検討会を開催したが、肩書きで引っ張られてしまうことがあった。自分の事例を気持ちよく話せるのであればその方法を取り入れてみようかなと思ったのが参加のきっかけ。

参加してみて、ファシリテーターはいるが、その人が主導するわけではないというのが大変に心地良いし、偉い先生がいる時のようにハラハラしてしまうこともない。また、参加者がお互いを労りあっている感じが良かった。職場での助言は、「私はこうしたよ」などと距離感が近すぎて、自分が迷い、試していることを否定されるように聞こえることがある。違うことを言って欲しくて事例発表し、皆さんに温かいメッセージをもらい、できていることを言語にしてもらえて、もうちょっと頑張ろうって予想以上に嬉しかった。

仕事での活用として職場で SFRT のやり方を取り入れ、今まで発言しなかった人たちから大変好評。理由は、「できなかったことは自分が一番よくわかっているのでガミガミそれを言われたくない」「できていることはあまり自分で自覚できないので、言ってもらいたい」「できている点を言われれば、それを手掛かりに次の一步を自分で考えることができる」というもの。聞いてなるほどと思えて良かった。その場が安全でないとみんなが伸び伸び自分の力を発揮できないということが身にしみてわかり、そういう風に仕事を回そうと思うようになった。

サポーターとして提案をするパートを経験し、緊急対応が必要な時や相談中の同僚からヘルプを求められた時に、やり方をいくつか提案できるようになって、意識して訓練すればできるんだという感覚を持てるようになった。

リピート参加している理由は、新しい人との出会いへの期待と、その時々で話したいことがある

から。

SFRT を紹介するとしたら、職場や臨床現場のヒエラルキーが原因で話が通らないみたいなことで困っている場合は、そうではないやり方で行っているところがあるよという感じでお勧めすると思う。

インタビューの感想として、皆さんからもらったアドバイスによって、生活の中でも変化があった。新しいジャンルの音楽を聴くようになったり、アロマを使うようになったり。仕事だけでなく、生活でも変化があったのは予想外の収穫だった。

C さん

性暴力や犯罪被害の支援者が相互研鑽するという場に興味を持ったこと、ソリューションフォーカスの手法に馴染みがあり、この手法を用いた事例検討会に興味があった。

実際参加すると、様々な職種の援助職の方がいて、初対面でも深い体験を共有できる環境だった。普段は隠したいような感情や反応をしても大丈夫という不思議な体験だった。また利害関係がないところで自分の話をしたり、相手の話を自分のことのように一緒に考えさせていただいたりする大事な時間となった。グループカウンセリングのようでもあった。短時間で集中するため疲れるが、ワクワクする疲れで爽快な気分にもなった。

事例発表者としては、自分の状況について他の人の意見をニュートラルに聞きたいと思っていたが、うまく自分の事情を伝えきれず不安全感が残った。事例発表者としての体験は、必要な情報や自分が考えていることをどれだけ端的にわかりやすく短いセンテンスで伝えられるかのトレーニングになると思う。

サポーターとして参加すると、様々な領域・職場にいる人たちの話を聞けるのが純粋に面白く、どこでも共通した問題があることを知り、興味深かった。人によって着目する点が多様なので、自分の見立ての癖に気づいたりでき、自分の臨床活動に役立つと思った。

リピート参加の理由は、自分を素直に出せる場

であり、他の人から自分にない着眼点や気づきを
得て、自分を振り返る時間になっているから。

知り合いに紹介するとしたら、会議の提出表の
ような、資料を事前に作成する必要のない、みん
なで、今事例発表者が抱えている問題を一緒に考
えるような場ですよと話す。進め方のルールが明
確にあるので、そのルールは崩さずに進めていく
というコツがある。試しに一緒にやってみません
か、と誘う。

インタビューの感想は、どんな時間だったかも
う一度振り返る機会になった。その場で口から言
葉にするって、エネルギーがいる、聞くことと話
すことは違う脳を使っていると味わう時間にも
なった。

Dさん

参加動機は、構造化されている・良いところを
見つける・責められないという点に、今までとの
違いを感じたため。

実際に参加して他との違いを感じたのは安全
性。一人が場を専有することなく、個々が参加し
ている意義が十分に守られている。また、通常の
批判される事例検討と違い、やっていることを責
めず認めてもらえるので安堵。ケースも安全な形
で違う視点を提案してもらえるのが良かった。通
常、事例発表は嫌な緊張でドキドキするが、
SFRT はどんな意見がもらえるかという期待でワ
クワクした。

事例発表はケースの進め方の学びを期待してい
たが、SFRT の様子を知った後は、自分のやり方
が大丈夫か確認し安心したいという期待も加わ
り、実際 100% 応えてもらった。得られた様々な
アイデアが臨床の可能性を広げて日々の実践で役
立った。さらに患者と会うときの恐れが減って、
のびのび落ち着いて会えるようになった。

サポーターとしては様々なケースの学びを期
待。さらに、解決志向的にどんな発言や観察がで
きるかも学びたいと思うように。それらは 80%
満足。100% でないのは、テーマが自由なため、
場合によっては事例の現場をよく知らなくて、十

分応えられなくて戸惑ったところもあったため。
サポーターを体験し、できていることをまず伝え
ることで安全感が生まれ、アドバイスが受け取り
やすくなると学んだので、職場で新人の指導する
際、良いところを指摘するようにしたら良い効果
があった。

リピート参加の理由は、1 クール中に発表の機
会が担保されている点。他は時間不足で発表でき
ないことも多い。サポーターとしても短時間で
色々なケースが学べ、解決志向な視点で観察や、
エンパワメントの練習になる。さらに、安心で居
心地がよいこと、参加費が安価なこと、1 クール
3 回という回数もダレずにちょうど良い。

SFRT は特に若手に勧めたい。厳しい指導や大
勢の前で叩かれるのが当たり前なので、「資料も
いらないければ、むしろ褒めてもらえるすごく安心
安全な事例検討会ですごく力になる」と伝えたい。
資料準備の手間がかからない点もハードルを
下げている。

インタビューの感想は、SFRT 的な態度で後進
や患者と会えていることなど、ただ単にケースの
学び以上の魅力を感じていることを再確認できて
よかった。

結 果

インタビューガイドを元に得られた語りのまと
めを表 3 に示し、インタビューガイドに沿って述
べる。

1. SFRT を用いた事例検討会への参加動機と
して、「従来の事例検討会に対する疑問」を 3 人
が挙げ、これまで参加した検討会が自由に発言で
きない雰囲気や、否定されたと感じることがあつ
たことや (B さん)、もともと事例検討会が好き
ではなかった (A さん) ことなどが語られた。ま
た、全員が「新しい事例検討会への求め」を、3
人が「SFRT の手法への興味」を挙げており、例
えば D さんは「従来の検討会とは違う、良いと
ころを見つける・構造化されている・責められ
ないという点に今までとの違いを感じて」と語って

表3 面接対象者の語りのまとめ

	A	B	C	D
1 SFRT 事例検討会参加の動機	従来の事例検討会への疑問 新しい事例検討会の求め SFRT 手法への関心	従来の事例検討会への疑問 新しい事例検討会の求め	新しい事例検討会の求め SFRT の手法への関心	従来の事例検討会への疑問 新しい事例検討会の求め SFRT 手法への関心
2 SFRT 事例検討会の体験	安心 安全 自由 プレッシャーのなさ	安心 安全 心地よさ	安心 安全 心地よさ ワクワク	安心 安全 ワクワク
5 事例発表者としての期待	事例発表への興味関心	安心の求め	他者の意見の求め	安心の求め 他者の意見の求め
5 (2) 期待へ応えた程度 (%)	75 ～ 80%	120%	60 ～ 70%	100%
5 (3) 事例発表者としての体験	肯定された体験 支え	肯定された体験 支え ありがたさ	うまく伝えられない 不全感	新たな視点 支え
5 (4) 仕事への活用	はい	はい	はい	はい
5 (5) 発表体験の仕事への活用	孤立している心理師へのサポート 安心・安全な検討会ニーズを満たす	安心・安全な検討会ニーズを満たす	伝え方、聞き方の活用	実践でのアイデアの活用 実践に取り組む姿勢の変化
6 (1) サポーターとしての期待	様々な実践への関心 心地よさ 安心感	意識せず	様々な実践への関心 心地よさ	様々な実践への関心 SFRT 手法への関心
6 (2) 期待へ応えた程度 (%)	100%	80%	80%	80%
6 (3) サポーターとしての体験	安心 豊かな時間	自身の反省	興味深さ 面白さ	興味深さ 戸惑い
6 (4) 仕事への活用	はい	はい	はい	はい
6 (5) サポーター体験の仕事への活用	SFRT の姿勢や手法の活用	SFRT の姿勢や手法の活用	自己理解	SFRT の姿勢や手法の活用
8 リピート参加の理由	学びが得られる 心地よさ 大切な場	よい出会い 相談をしたい	学びが得られる 安心 自分をふり返る場	学びが得られる 安心 心地良さ 価格・構造の手軽さ 発言が担保される
9 紹介するとしたら	安心 居心地の良さ 自由	新しさ 面白さ	手軽さ ルールの明確さ 支えになる	安心 手軽さ 支えになる
感想	自身の体験の振り返り	予想外の収穫	自身の体験の振り返り	予想外の収穫

いる。2. SFRT を用いた事例検討会へ参加した体験については、全員が「安心」、「安全」を、さらに2名が「心地よさ」、「ワクワク」を感じたとのことである。また、Aさんは「プレッシャーがなく」「自由」であったと語った。

5. 事例発表者としての期待は、「安心の求め」が2人、「他者の意見の求め」が2人、「(SFRTを用いた事例検討会での) 事例発表への興味関心」が1人であった。5(2) 事例発表体験が事前の期待にどの程度応えられたかについては60%から120%と差が見られた。Bさんは120%、Dさんは100%であったが、Cさんは60～70%と評定し、その理由として「うまく自分の状況を伝えきれなかった不安全感」によるものと語った。またAさんは75～80%として、「直後は拍子抜けしたが、長い目で指針となった」と語っている。5(3) 事例発表者としての体験に関しては、「(自分が) 肯定された経験」であったと報告したのが2人、「支え」になったという報告が3人であった。また、「新たな視点を得られた」、「ありがたかった」との語りも得られた。5(4)、(5) 事例発表者としての経験を今後の臨床に活かせるかという質問には全員が「はい」と回答し、具体的には「孤立している心理師へのサポート」、「安心・安全な検討会へのニーズを満たすこと」、「(事例検討会で出たアイデアの) 実践での活用」、「臨床や検討会での伝え方、聞き方への活用」が、すでに実践されているとのことであった。また、Dさんは、恐れが減って、のびのび落ち着いて患者に会えるようになったと、「実践に取り組む姿勢の変化」があったことを語っている。

6. サポーターとしての参加する際の期待は、「様々な実践を聞くことへの関心」が3人、「心地よさ」が2人、「安心感」、「SFRT 手法への関心」が1人であった。6(2). サポーター体験が事前の期待にどの程度応えられたかについては80%から100%との評定で、6(3) サポーターとしての体験は「興味深さ」を2人が挙げており、その他に、「豊かな時間」になった、「安心」を感じた、「面白さ」、「戸惑い」、「自身の反省」を感じ

たという回答が1名ずつであった。6(4)、(5) サポーターとしての経験を今後の臨床に活かせるかについても全員が「はい」と答え、具体的には、3名が「SFRT の姿勢や手法の活用」を挙げる一方で、Cさんは「自己理解」としての活用を語られた。

8. SFRT を用いた事例検討会へ複数回参加している理由は、「心地よさ」、「安心」、「学びが得られる」が2名ずつ、「大切な場」、「よい出会い」、「(ケースの) 相談をしたい」、「自分をふり返る場」、「価格・構造の手軽さ」、「発言が担保される」という回答がそれぞれ1名ずつであった。9. SFRT を用いた事例検討会を他者へどのように紹介するかについては、「安心」、「支えになる」、「手軽さ」を伝えたいという回答が2名ずつ、その他「居心地の良さ」、「自由」、「ルールの明確さ」、「新しさ」、「面白さ」が挙げられた。最後にインタビューの感想として、2名が「自身の振り返り」になったことを語った。また臨床だけでなく私生活でも変化が起こった(Bさん) など、SFRT を用いた事例検討会への参加によって「予想外の収穫」があったことを2名が挙げていた。

考 察

結果から、対象者の多くが、「従来の事例検討会への疑問」を認識し、「新しい事例検討会を希求」する中で、「SFRT 手法への興味」を持ってSFRT を用いた事例検討会に参加したことが明らかとなった。以下に、インタビューで明らかとなった対象者の体験の共通点・相違点を踏まえて、SFRT を用いた事例検討会の効果と課題を検討し、それらにつながる特徴を考察する。なお、「」は表3に示した語りの内容を指す。

1. 安心感・安全感

対象者は、事例発表者としても、サポーターとしても、「安心」を期待してSFRT を用いた事例検討会に参加し、対象者全員がSFRT を用いた事例検討会の体験について、「安心」、「安全」を感じたと語った。また、「心地よさ」という言葉

も頻出していた。以上から、SFRT を用いた事例検討会が、参加者全員にとって「安心」、「安全」の感覚を得られる場であることが示唆されたといえる。SFRT を用いた事例検討会の何が、参加者の「安心」、「安全」につながるのか、その要因として以下の二点が考えられる。

一点目は、SFRT を用いた事例検討会において、事例発表者を肯定する時間が構造化されている点である。「人間は、安心できる場でないとい十分な自己表現はできないものである。“批判しないというルール”はきわめて重要なルールである。」と村山ら（2012）が述べる通り、事例検討会で批判しないルールを設けることが参加者の安心感につながる点はすでに確認されている。さらに SFRT を用いた事例検討会では、事例発表者を肯定する時間が確保されており、インタビュー結果からも、事例発表者として「肯定された体験」により「支え」や「ありがたさ」を感じたことが示されている。このように、批判されないことに加えて肯定する時間が確保されることによって、事例検討会全体がより「安心」、「安全」な場になる可能性が示されたと言える。

二点目は、肯定する時間も含めて事例検討会の手順全体が構造化され、参加者の発言の機会が平等に担保されていることである。SFRT を用いた事例検討会では、決められた時間内で参加者が順番に発言するルールがあり、順番が回ってきた際に発言しない権利も認められている。従来の方法による事例検討会は発言が偏りがちであるという指摘があるが（村山・中田、2012）、D さんがインタビューで「安全」について「一人が場を専有することなく、個々が参加している意義が十分に守られている」と語ったように、発言する・しない双方の権利が認められる SFRT を用いた事例検討会の構造は、参加者の心理的負担を軽減し、「安心」、「安全」を高める要因となるものと考えられる。

2. 孤立しがちな支援者へのエンパワメント

先に、SFRT を用いた事例検討会の効果の一つ

として、「安心」・「安全」を体験できる場であることを挙げた。また、インタビュー参加動機である「従来の事例検討会への疑問」としてダメ出しをされると発言があったこと（B さん）や、SFRT を用いた事例検討会の体験を「孤立している心理師へのサポート」で活かしているという A さんの発言などからは、現場の支援者の中に、取り組みを批判され、孤立し、ケアを必要としている人が、少なからず存在しているという現状がうかがえる。武井（2022）は支援者ケアの必要性を訴える中で、事例検討会についても、問題解決そのものよりも事例発表者が共感的な反応を得ること、つまりグループの中でケアされることが最も大切であり、そのような場はすべての参加者にとってもエンパワメントになりうると述べている。インタビューで得られた「安心」、「安全」、「居心地の良さ」という語りは、SFRT を用いた事例検討会がまさにこのエンパワメントを促進するものであり、孤立しがちな現場の支援者に対しケアを提供する役割を果たす場である可能性が示されたとも言えよう。

3. 対人支援専門職としての学び

インタビューでは、SFRT を用いた事例検討会の体験について、「安心」、「安全」に加えて「ワクワクした」、「自由」という語りも得ることができた。対象者らは、事例発表者として「他者の意見を求め」、サポーターとして「様々な実践への関心」を持って事例検討会に参加した結果、「新たな視点」や「興味深さ」、「面白さ」を得ていた。リピート参加の理由についても、「安心」に加え、「よい出会い」、「学びが得られる」、「自分を振り返る場になる」など自己成長に関する内容が挙げられていた。さらに対象者らは、事例検討会への参加体験を、「安心・安全な検討会の開催」、「伝え方・聞き方の練習」、「得られた提案の実践」、「実践に取り組む姿勢の変化」、「SFRT の姿勢や手法の活用」など様々な形で、仕事に活かしていることも明らかとなった。以上から、SFRT を用いた事例検討会への参加が、参加者に新しい学び

と成長をもたらしたものと考えることができる。こうした新しい学びにつながる、SFRTを用いた事例検討会の特徴としては、以下の二点が考えられる。

一点目は、Jacyna & Harris-Waller (2014) が述べた通り、肯定の時間の後に設定される発案の時間によって参加者一人一人に発言する機会が保障されていることである。肯定の時間と発言機会の保障が、参加者の「安心」、「安全」を高めることはすでに述べた。加えて言うならば、肯定の時間で「安心」、「安全」の感覚を得たうえで、発案の時間で平等に発言機会が保障されることが、さらに参加者の「安心」、「安全」を高めることにつながり、その結果として参加者が「興味深い」意見を「自由」に交わすことができるようになるものと考えられる。「安心」、「安全」が確保された環境で、「興味深い」意見が「自由」に交わされる場だからこそ、参加者は「ワクワク」し、「面白い」と感じながら「新しい学び」を吸収することができるのではないだろうか。このように、場に参加しているすべての人が貢献できる形にデザインされているSFRTを用いた事例検討会の特徴が、新しい視点に触れる機会の増加と学びにつながるものと考えられる。二点目は、手順が構造化され1事例30分で進行する点である。事例発表者は4分で自身の報告をする必要があり、質問・肯定・発案も、限られた時間でサポーターの発言が求められる。事例検討会全体がコンパクトな構造であることによって、参加者が簡潔な報告、的確な質問やニーズ把握、効果的な肯定・発案の言葉選びなどを学ぶことにつながる点も、SFRTを用いた事例検討会の特徴であると言えよう。

4. SFRTを用いた事例検討会の課題

SFRTを用いた事例検討会への参加が参加者の安全性を高め、新しい学びを得ることにつながる効果があることが分かった一方で、インタビューでは「拍子抜け」(Aさん)や、「不安全感」(Cさん)、「戸惑い」(Dさん)が語られる場面もあった。Aさんの「拍子抜け」は、従来の事例検討会で指導

者から得られるような具体的アドバイスがなかったことに対する感想であり、Cさんの「不安全感」は短い時間でうまく事例発表できなかったことに対する思いであった。また、Dさんの「戸惑い」は、サポーターとして事例の現場に詳しくないが故にコメントに迷ったことについて述べられている。さらに、Dさんと共通すると思われる体験として、Bさんも良い提案ができなかったことを「自己反省」として語っている。

SFRTを用いた事例検討会が1事例30分という短い時間で進められる点はすでに述べたが、従来の時間をかけてじっくりとケース理解を進める事例検討会に慣れてきた参加者にとっては、時間が足りない、ケース理解が不十分と感じることもあるのかもしれない。事例発表者は4分でケース概要と自分自身のニーズを報告する必要があり、サポーターも限られた時間で発表者の資源をフィードバックし、提案を発言する必要がある。簡潔かつ相手に伝わるメッセージを送るという、解決志向アプローチの手法に不慣れな参加者にとっては、「戸惑い」や「不安全感」を感じることもあるようである。

こうした反応を軽減させるためには、事例検討会へ参加する前の段階で、今すでに達成している小さな解決を見つけて増幅するという解決志向アプローチの基本理念(O'Connell, 2003)を知り、SFRTを用いた事例検討会の姿勢や手法について理解を深める作業ができるとよさそうである。また、問題解決以上に参加者全員のケアとエンパワメントの必要性が指摘される通り(武井, 2022)、SFRTを用いた事例検討会もケアとエンパワメントに主眼を置いているという点についても、事前に伝えておくことが重要であろう。以上から、特に解決志向アプローチになじみのない初参加者を中心に、事前学習の機会を提供することによって、SFRTを用いた事例検討会の効果をより発揮できるようになるものと考えられる。

5. 本研究の意義と課題

本研究では、SFRTを用いた事例検討会に複数

回参加した経験のある対象者へインタビューを実施し、対象者による語りを分析して、SFRT を用いた事例検討会の効果とその要因となる特徴を検討した。SFRT を用いた事例検討会が最も重視してきた、参加者の安心・安全、参加者のケアとエンパワメントを、実際の参加者の語りによって効果として確認することができた点、さらに、参加者の安心・安全の感覚が新しい学びの獲得を促進する可能性を指摘した点は、これまでにない試みであり、本研究の成果である。また、本研究で得られた効果につながる要因として、明確な構造化、肯定の時間とそれに続く発案の時間が設定されていること、参加者に等しく発言の機会が保障されていることなど、SFRT を用いた事例検討会の特徴を示すことができた。本研究で得られた効果、またその要因として考察された SFRT を用いた事例検討会の特徴は、先行研究の記述 (Jacyna & Harris-Waller, 2014) とおおむね共通するものであった。以上から、本研究によって、SFRT を用いた事例検討会がもたらす効果が普遍的である可能性を示唆したという点においても、本研究は意義があると考えられる。

しかし、本研究はあくまでも本邦におけるパイロットスタディである。今後はさらに、SFRT を用いた事例検討会の参加者を対象とした、実証的な効果検討が必要であろう。特に本研究結果を踏まえると、参加者の心理的安全性や自己効力感、自己成長感などを指標とした量的な効果検討と、事例検討会参加による参加者の心理的变化を明らかにするための質的な検討の、両方を行う必要があるものと考えられる。今後は、新しい事例検討のやり方である SFRT を用いた事例検討会について、より多くの場面での活用を視野に入れて、丁寧な効果検討と修正を重ねていきたい。

引用文献

井出智博 (2013) 児童養護施設における“機能する事例検討会”の創造—PCAGIP を取り入れた取り組み—. 日本人間性心理学会第 32 回大会プログラム

ム・発表論文集, 162.

- Jacyna, N., & Harris-Waller, J. (2014) “Time to reflect” : Using solution-focused reflecting teams with family and children’s services staff. *The Magazine for Family Therapy and Systemic Practice* (pp. 8-11).
- 村山正治・江口尚子・衛藤萌・小埜優依・黒川明宏・立川隆一・久留玲子・前泊麻理菜・前田有加・三澤篤・山口瑞穂・奥原孝幸 (2009) エンカウンターグループとインシデントプロセスを組み合わせた新しい事例検討法 (PCAGIP 法) の実際 (Ⅲ) — PCAGIP 法の実際例の報告と考察 —. 東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談センター紀要, 9, 3-13.
- 村山正治・中田行重 (編) (2012) 新しい事例検討法 PCAGIP 入門—パーソン・センタード・アプローチの視点から—. 創元社
- 望月洋介 (2013) 若手心理臨床家の事例検討法としての PCAGIP の効果検討. 日本人間性心理学会第 32 回大会プログラム・発表論文集, 88.
- 中原睦美・多田真理子・臼井香・長谷川智恵・森田健太郎・笠井清登 (2022) 母親の語りから見た精神病未治療期間 (DUP) をめぐる葛藤とその支援. 心理臨床学研究, 40 (5), 403-414.
- 並木嵩浩・小野真由子 (2016) PCAGIP 法研究の動向と課題. 関西大学心理臨床センター紀要, 7, 91-100.
- Norman, H. (2003) Solution Focused Reflecting Teams. In O’Connell, B. & Palmer, S. (Eds) *Handbook of Solution-Focused Therapy* (pp. 156-167). London: SAGE Publications.
- Norman, H., Pidsley, T., & Hjerth, M. (2005) Solution Focused Reflecting Teams in Action. In M. McKergow & J. Clarke (Eds.), *Positive Approaches to Change – Applications of Solutions Focus and Appreciative Inquiry at Work* (pp. 67-80). Cheltenham: Solutions Books.
- O’Connell, B. (2003) Introduction to the Solution-Focused Approach. In O’Connell, B. & Palmer, S. (Eds) *Handbook of Solution-Focused Therapy* (pp. 1-11). London: SAGE Publications.
- 小野真由子 (2020) 事例提供者の発言に着目した PCAGIP 法における体験の特徴. 関西大学心理臨床センター紀要, 11, 67-76.
- 武井麻子 (2022) 支援者を支えるコンサルテーションとスーパービジョン. こころの科学, 222, 26-31.

Effectiveness and Challenges of Case Conferences Using Solution Focused Reflecting Teams - From Interviews with Participants

Eriko Takaki / Moyuko Nishimura / Tamami Kumagai /
Junko Nakaoka / Yoko Arai / Miho Tanaka / Eri Sawa

This study examined the effectiveness and challenges of case conferences using Solution Focused Reflecting Teams (SFRT). Semi-structured interviews were conducted with four participants who had attended SFRT case conferences provided by our team at least twice, and the commonalities and idiosyncrasies of their narratives were analyzed. The results showed that participants felt "safe" and "secure," that they were "affirmed" and "supported" as case study presenters, that they had an "interesting" and "inspiring" time as supporters, while some participants felt "confused" and "inadequate." These results suggest that SFRT case conferences are effective in: (1) increasing participants' feelings of safety and security, (2) empowering participants, and (3) providing new learning opportunities for participants. Factors contributing to these results included the SFRT's structured way of conducting case conferences, especially the affirmation and suggestions phases. The significance and challenges of this study were also discussed for future research.

Keywords: SFRT, Solution Focused Approach, Case-Conference, Supervision, Empowerment